

鴨東通信

おうとうしん

冬

四季報 No.76
2009.12

▶シリーズ古都の近代 〈第2回〉

古都の景観問題

丸山宏

▶てーたいむ

祭りは京都のショーウィンドウ

山路興造

▶史料探訪⑨

安田靫彦「飛鳥の春の額田王」

國賀由美子

▶エッセイ

歴史を学び現在を知る

安高啓明

書けること、書けないこと、書ききれないこと 富永望

▶リレー連載 世界のなかの日本研究2

スイスで見たこと・考えたこと

久留島浩



◎新刊案内◎

京都 芸能と民俗の文化史／茶の湯文化と小林一三／
革新の書人 河東碧梧桐／春秋 京大和翠紅館／中世
前期女性院宮の研究／禁裏本歌書の蔵書史的研究／東
寺百合文書(七)／近世長崎司法制度の研究／広瀬旭莊
全集 詩文篇／瑞泉寺史／悟溪宗頼 虎穴録訳注／西
村茂樹研究／象徴天皇制の形成と定着／情熱の移植医

シリーズ古典再生2

日本の心と源氏物語

岡野弘彦編

【待望の最新刊】



古事記や万葉集に表現される神話時代の男女の姿のなかなには、神を育て、神に添って、神の意志を普遍化するという女性特有の聖なる力が見いだせる。それこそが、『源氏物語』の男女の恋にも続いている。日本人のロマン性を持ったあこがれの思い、心の基層である――

宮中歌会始の選者を永年務めた編者が、師である折口信夫が体系化できずに終わった「いろこのみの道徳」論に向きあい、『源氏物語』に流れる日本の心を読み解く。

内容

源氏物語に流れる日本人の心の伝統

『源氏物語』が内包するいにしえびとの心／『源氏物語』は日本の物語の原型／『源氏物語』へとつながる神話の古層／和歌の世界と物語の成立／平安文学の中の『源氏物語』／源氏物語を構想した折口信夫

『源氏物語』(グレート・ブックス)の演習方法と実際 (須賀由紀子)
民俗学から読む『源氏物語』 (松田義幸)

『源氏物語』の感染教育力 (江藤裕之)
ネットワーク時代の『源氏物語』 (犬塚潤一郎)

▼四六判・二四八頁／定価一、八九〇円

おかのひろひこ…大正一三年三重県生まれ。歌人、日本芸術院会員、國學院大學名誉教授。著書に『折口信夫伝 その思想と学問』(中央公論新社)『恋の王朝絵巻 伊勢物語』(淡交社)など。

シリーズ古典再生1

一千年目の源氏物語

伊井春樹編

たんなる古典復興ではなく、それらの作品を現代の眼でもう一度見直して再生することを目指して開催された東京・京都のシンポジウムをもとにし、斯界の識者による「源氏物語論」を集約。

内容

近江の君について

「いろこのみ」の女神と光源氏

昭和が発見したもの

私にとつての『源氏物語』

シンポジウム「一千年目の源氏物語」

『源氏物語』の宗教性

『源氏物語』と京ことば

『源氏物語』と寝殿造

『源氏物語』をめぐる人々

シンポジウム「私の源氏物語」

▼四六判・二五二頁／定価一、六八〇円



源氏物語 千年のかがやき

国文学研究資料館編

新出の国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』全54枚をカラーで掲載し、詳細な解説を付す。あわせて図様が近似する他の源氏絵についても参考資料として多数掲載。描く・書き写す・鑑賞するという3つの観点から、源氏物語が千年間どのように享受されてきたのか、豊富なカラー図版で紹介する。

▼A4判・一六八頁／定価一、九九五円

古都の景観問題

丸山 宏



『日出藝林』(第40号、昭和8年8月5日)平安神宮大鳥居の設計は当時京都府技師の阪谷良之進、京都帝国大学教授武田五一が顧問であった

京都岡崎公園にある平安神宮大鳥居は、昭和大典記念として昭和三年一〇月に竣工した。

平安神宮は明治二八年、平安遷都千年記念祭を機に平安京の大極殿を模して創建されたもので、建設途中で官幣大社に列せられ「平安神宮」となった。鳥居のない神社の時期が長かったが、ようやく大典記念で可能となったのである。建設当初からこの巨大な建造物(高さ二四・四メートル)に対して賛否両論があったが、竣工の五年後『日出藝林』(第四〇号)に「平安神宮大鳥居問題は々々々」(写真参照)と題する特集記事が掲載された。「……ここにかねてより京都美の保存に意を致せる本誌は京都の風致にも、神社の尊厳にも甚だ憂慮すべき問題を捉へて本誌関係の諸名士、学者、美術家に、わが京都美と神社の尊厳を護るためには、此鳥居は破壊すべきや、改

造すべきや、又は保存しおくべきやとの意見を徴し、以つて当局者の反省を促し、将来又かゝる事なきやうにとの希望を大方に伝へんとして、この企画を発表した」とある。誌上での各界名士四〇名の言は結構言いたい放題である。紙幅の関係でわずかではあるが紹介したい。美術史家の源・豊宗は「大極殿に則りて造営された平安神宮」には鳥居は根本的に様式を異にし不必要だと。また、有職研究家の吉川観方(あきみ)は「京都の名所中にあのやうな田舎者だましの不真面目な建物を加へて置きたくない」と手厳しい。概して批判的な意見が多く掲載された。昭和初期の大鳥居の景観問題は現在ではどうなったのか。この大鳥居は平成一四年八月に国の登録有形文化財に指定された。景観問題でかまびすしい昨今、文化財として「京都美」に貢献しているのであらうか。

(まるやま・ひろし 名城大学農学部教授)

●ハレとケ、本物のエネルギー

僕は東京生まれの東京育ちで、小学校五年生までは日本橋で育ちました。人形町近くで末広亭の寄席よせがあり、戦前の雰囲気が残っていました。隣の芳町よしちやうの芸者さんたちが戦火をまぬがれた衣装を着て、日本橋の上で踊ったのを今でも覚えています。昭和二〇年八月に戦争が終わり、その年のお祭りは大々的に行われました。鬱積ふさしていたいろんなものが爆発したのです。

民俗学に興味を持ったきっかけは、逆に都会育ちだったからです。渋谷に移った小学校六年生の時に、近くの金王八幡宮こんおうでお祭りがありました。その時担かがれた神輿を見て恥ずかしくて押し入れの中に隠れました。なぜなら本物でない都会のお祭りで、お祭りの中にある爆発力の人々の中に感じなかったからです。

早稲田大学に入學して地方のお祭りを見に行った時、地方はまだ「本物だ」と思いました。民俗学の用語で「ハレの日」「ケの日」というものがあります。日常の生活（ケの日）が苦しいほど、ハレの日の爆発力が大きいのです。東北や沖縄のお祭りが大変はなやかなのは、日常が苦しいのでハレの日に爆発するから

ていーたいむ

祭りは京都のショーウィンドウ

山路 興造

(元京都市歴史資料館館長・藝能史研究会代表委員)

●祭りとは若者教育

です。その力が本物なのです。それが祭りのエネルギーです。まだまだ地方に残っていた本物の祭りのエネルギーに惹かれたのが、民俗学に興味を持った大きな原因です。

民俗芸能は地域共同体における「若者教育」「子供教育」の場でした。昔は若者組という若者たちだけの組織があり、一五歳ぐらいになると酒一升を持って仲間に入れてもらい、先輩からいろいろな教育を受けます。地域共同体が人間を育てることが封建時代からのならわしでした。その教育に祭りの芸能を使います。芸能を先輩たちが厳しく仕込み、祭りは試験の日です。毎年見ている皆が試験官で、祭りで演じおこなうことによって、その人の後の評価が定まります。昔は若者たちが一生懸命に先輩たちのいうことを聞いて、それなりの修練を積んで芸能が行われていました。民俗芸能といえども芸能である以上、修練を積むと表現としての美しさを持ってくるのです。

ところが、今は無理矢理にやらされているように感じます。先輩たちも厳しくいうとやって

くれないから適当に教えています。今の民俗芸能は形骸化してしまつて、本来持っているいろんな意味での美しさがもうないのですね。祭りで心を解放して、ハレの日を楽しむという雰囲気になくなつてきているのです。

●京都の祭りの伝統と誇り

——昨日一〇月二日は時代祭で、山路先生は時代考証委員としてご活躍されましたね。

朝七時に平安神宮に集まつて祭りの準備を行いました。京都市民が中心です。京都三大祭りは、葵祭も祇園祭も時代祭も基本的にはボランティアです。お弁当を出すけれどお金は出しません。伝統に対する誇りや祭りを行う意味を知ることによつて、祭りの伝統を存続させてゆきます。

時代祭には宣^{せん}状^{じょう}祭^{さい}というお祭りがあります。この宣^{せん}とは、いわゆる詔^{みことのり}です。ボランティアも含めて参加者全員二、〇〇〇人に、それぞれの名前が書いてある立派な状が、平安神宮から授与されます。参加者に誇りを持たせる方法なのです。

民俗学的見解から言つても、祭りを行う人たちの意識がきちつとしてゐるから京都の祭りは長く続いているのだと思います。時代祭も京都市民の祭りで、各学区の人たちがボランティアのシステムを作っています。皆一生懸命です。



金銭を含む負担をするのは当然だという意識でやっています。

平成六年に建都一二〇〇年を記念して「京都祭」が、京都市の主導で始まりました。いわば京都市の官制祭ですが、今は市の財政難で出来なくなりました。行政が笛を吹いたものは長続きしません。「笛吹けど踊らず」です。ところが、伝統にのっとり市民ひとりひとりの意識をちゃんとかき立てている祭は長続きします。自分たちがやってきたというプライドがあります。

三大祭りは京都市民の作り方がうまいのです。時代祭は明治二八年に京都市民によつて創られた祭りです。たとえば西陣の人が時代行列の衣装を作るなど、京都市民のさまざまな伝統技術で出てゐるわけです。だから実際に参加しなくても、作ることによつて参加をしていただきます。京都市民の伝統技術を祭りに結集させるやり方は、行政の係官では出てきません。京都市民だからこそ出来た知恵です。

●京都の誇れる技術・今も昔も

——時代祭の室町時代列（室町幕府執政列・室町洛中風俗列）は、桓武天皇一二〇〇年大祭の記念事業として平成一九年より参加した行列です。この室町洛中風俗列は、一六世紀、室町時代後半に経済力を蓄積した京の町衆によつて盛んに催された風流^{ふうりゅう}踊りを再現したものです（『時代祭』平安講社本部編集・発行、二〇〇八

年より)。山路先生は猪熊兼勝先生ら五名の先生方と行列の考証に携われたんですね。

室町時代列で重要視したのは、時代考証をきちつとして京都の持っている技術で復元することでした。ところがその技術がだんだん廃れてきています。職人さんがなくなっているというよりも、仕事がなくなっているのです。昔からの古い技術で作る機会がなくなっています。でも時代考証をきちつとやることにより、その仕事を作るようになります。時代祭の衣装を作るのはものすごくお金がかかります。しかしそれはあえて職人さんたちの技術を生かす仕事を作り出しているという側面を持っているのです。

祇園祭の鉾ほこのタベストリーも、江戸時代に作ったものを西陣の人たちが復元新調しています。祭り自体が京都産業を支えることと結びついているのが、京都の祭りのよいところなのでしょう。

室町時代列復元には費用が一億円かかりました。本物を作るためにはお金が高つくきます。でも京都の技術を伝承する意味を、やる人も作る人も寄付する人たちもわかっていますから、あまり文句を言わない。お金がかかるのだつたら着物を化繊にしようなどとは言いません。京都の人たちは目が肥えているし、作る方も誇りだし、さすがですね。

——時代考証に携わっている山路先生や猪熊先生をはじめとした先生方、またその衣装や装飾を作られる方も皆一流づくしですね。

僕は京都人でないから忸怩じくじたる思いがありますが……。一般に京都人はけち、であまりお金をかけないといえます。日常生活が非

常に質素だということです。でも祇園祭の時のさまざまな装飾品は、その時代の最高の技術で作ります。だからお金がすごくかかります。でもそれをあえてやるのが京都の誇りです。

京都の産業にとって、祇園祭に代表される祭りはショーウィンドウです。今はルイ・ヴィトンにしてもブラダにしてもお店のショーウィンドウに一番いいものを見せていますが、昔はそういうものがありません。そこで、京都の商人たちは祇園祭に最高のものを飾ることによって、自分たちの産業の最高の見本を見せているのです。それを見ていろんな人たちが京都はやっぱり素晴らしい、帯が、着物が、織が素晴らしい……ということになっていくわけです。信仰行事の祇園祭が、商売の最高の見本市なのですよ。そのへんはやはりすごいですね。

祇園祭巡行の最後に巡行する南観音山みなみくわんのさんざんの見送りは、加山又造かやまたぞうさんがデザインした素晴らしい龍の装飾品です。その龍の目に、京セラがクレサンベルという人造宝石のルビーを埋め込み、非常に話題になりました。京都産業の最先端を祇園祭に使うというのは、今でも生きているのだなあとと思いました。それが京都の祭りの生かし方、京ブランドの生み出し方ですね。今フランスやイタリーがやっているブランド商法を、すでに京都は室町時代からやっていたのです。室町時代から現在までずっと、祭りは京都のショーウィンドウの役割を果たしてきたのです。

史料

探訪

39

安田鞞彦「飛鳥の春の額田王」

滋賀県立近代美術館主任学芸員

國賀由美子

近畿の中で最も東に位置する滋賀県は、四方を山地に囲まれ、そのほぼ中央に面積の約一六パーセントを琵琶湖が占めている。

県内南西部の大津市と草津市の境にある瀬田丘陵の中腹に建つ滋賀県立近代美術館は、今年で二五周年を迎えた。昭和五九年（一九八四）八月の開館は、環境問題にかかわる世界湖沼会議の開催に合わせて公開されたものであった。その前に、開設準備期間の約四年にわたり、美術作品収集に努めていたので、コレクションの歴史はおよそ三〇年ということになる。日本美術院を中心とした近代日本画、滋賀県にゆかりのある作品、戦後のアメリカを中心とした現代美術、という三つの収集方針にしたがって作品を収蔵し、その調査研究、保全管理、そして展示公開が進められてきた。

コレクション中には、その中でもとくにこれという、白眉とよぶべき作品が何点かある。もちろん、人の主観や好みによって意見は異なるうが、日本美術院の分野なら、速水御舟「洛北修学院村」や菱田春草「落葉」、滋賀県ゆかりの作品なら、重要文化財狩野派「近江名所図」などは、どなたにも納得いただける珠玉のコレクションと言っている。安田鞞彦「飛鳥の春の額田王」も、

そんな珠玉の一点である。古典や日本史の教科書、副読本で、この絵が記憶の片隅にある方も少なくない。

——なんて、美しい赤なんだろう——この絵を初めて目の当たりにしたとき、描かれている対象をひとつひとつたどる以前に、まず筆者はそう感じたことを覚えている。さきほどの速水御舟は、安田鞞彦の絵はいい匂いがあると聞いた。安田の愛弟子で滋賀県が生んだ女流画家、小倉遊亀は、それを色彩に置き換えると赤が多い、魅力的で楽しく暖かい雰囲気がある、と語っている。

さて、当館には、小倉遊亀コーナーがある。脆弱な日本画のことうえ、二か月に一度展示替えしながら、常時小倉作品が十数点は観ていただけるかたちで、全国の方々にお応えしている。昭和五五年（一九八〇）、文化勲章を受章したこの年に、小倉は美術館を開館予定の郷里滋賀県に、院展出品作を中心とした自作二〇点を寄贈した。これを核に、当館は小倉作品の収集にも力を入れてきた。小倉遊亀は明治二八年（一八九五）滋賀県大津の生まれ。大津高等女学校を出て奈良女子高等師範学校国語漢文科に学ぶが、ここで後に師となる安田鞞彦の名を覚えた。



安田鞆彦「飛鳥の春の額田王」
(滋賀県立近代美術館蔵)

ことを余儀なくされたが、水木は病床の安田を励まし続け、安田は水木への敬慕の念を終生忘れなかった。大正六年（一九一七）に女高師卒業後、小倉は教鞭を執りながら画道をめざし、同九年には横浜真女学校の職を得て、心に決めた大磯の安田邸の門を叩き入門を果たす。その後は安田と水木のやりとりは小倉を介することが多くなり、三者の交流が書簡などから読み解ける。

近年、水木要太郎に関する資料が整理されて研究が進み、この十月には思文閣出版より『文人世界の光芒と古都奈良―大和の生き字引・水木要太郎―』が上梓された。この中で高木博志氏は水木が奈良女高師で行った教育内容を分析されており、実地に学び最新の学知を与えられたことなど、小倉が学んだ内容を確認することができる。今後小倉の画業を考える際にも大いに示唆を与えてくれるであろう。

もう一度、本題に戻ろう。「飛鳥の春の額田王」は、昭和三十九年（一九六四）の第四九回院展出品作。水木と出会った奈良留学からは半世紀以上を経、水木逝去のときからも、すでに三〇年近い歳月が流れている。水木はずっと安田の描いた「聖徳太子像」を秘蔵し、若き日の小倉は頼んでこれを模写させてもらったこともあった。さらに安田は戦前から法隆寺金堂壁画模写にもたずさわ

小倉遊亀を画道に導いたのは、奈良女高師時代の恩師、横山常五郎と水木要太郎によるところが大きい。彼ら二人によって画家安田鞆彦の偉大さを知り、自らの生涯の師として選びとったのであった。横山は東京美術学校出身の図画教室教授で、自由な絵画教育を行い、一方の水木は「大和の生き字引」「大和の水木か、水木の太和か」と言われた、奈良を代表する歴史研究者。安田鞆彦は明治四〇年（一九〇七）、二六歳で岡倉天心の勧めにより古美術研究のため奈良に留学するが、しばしば水木宅を訪れて、教えを受けている。留学中に健康を害し、志半ばにして奈良を離れる

り、火災による焼損の憂き目も経験している。奈良の地、ことに飛鳥の世には、想い出深く万感の思いがあったであろう。歳月が経過してこの作品を制作するのにも、描きたいものが多すぎて取捨選択に窮したという。

この作品は、額田王の背後に、遠景に畝傍^{うねび}、香具^{かぐ}、耳成^{みみなし}の大和三山、その手前に藤原宮、本薬師寺の三重塔、川原寺の伽藍を配し、飛鳥川を挟んで手前から飛鳥板蓋宮^{いさごもみや}、飛鳥寺、山田寺と描いている。年代的に史実と反する点もあるが、これぞ安田の飛鳥のイメージ、安田の描きたかった飛鳥そのものであった。人物は真正面からとらえるが、背景は遠景から近景にしたがい、水平の視点から俯瞰の度合を強くして観下ろす。古来のやまと絵、さらに奈良時代の絵因果経を思わせる描法や色彩、とくに遊糸描^{ゆうしよぼう}と呼ばれる流れるような美しい筆線は、新古典派といわれる安田の面目躍如たるところである。

安田鞆彦にとって、ある意味小倉遊亀は、奈良の水木からもたらされた使徒であったのかもしれない。入門の時以来小倉は、安田が世を去るまで終生師事し、毎年の院展出品作も必ず安田邸に携えて意見を乞うたという。

当館に小倉から寄贈された中に、「菩薩」という作品がある。安田の没した翌年の院展に出品されたそれは、紅梅一枝を拈^ねじて微笑む観音菩薩立像である。華が紅梅なのはもちろん儀軌^{ぎき}によらず、鞆彦がこよなく愛した梅が枝を、小倉が観音様に持たせたのだと考えられる。

— MEMO —

滋賀県立近代美術館

大津市瀬田南大萱町1740-1

Tel. 077-543-2111

ホームページ <http://www.shiga-kinbi.jp/>

・JR琵琶湖線「瀬田駅」(京都駅から5駅、17分)から帝産バスまたは近江バス「滋賀医大」行「文化ゾーン前」下車、徒歩5分

・車は名神・新名神「草津田上インター」から5分

・駐車場3か所(約320台収容可能、無料)

・タクシー利用の場合は「瀬田駅」から約10分

・なるべく公共交通機関をご利用下さい。

企画展示室 12月13日(日)

「第63回 滋賀県美術展覧会」

常設展示室1 12月20日(日)

「近代美術館の古美術」

*重要文化財 狩野派 近江名所図 公開

「小倉遊亀コーナー」

常設展示室2 12月20日(日)

「ヨーロッパ・アートの魅力」

歴史を学び現在を知る^{いま}

安高啓明

多くの人が一度は耳にしたことがある「犯科帳」^{はんかちょう}。池波正太郎氏が「鬼平犯科帳」を発表して以来、時代劇の定番としてお茶の間の人気である。ご存知のように鬼平とは火附盗賊改^{ひつけうぞくかへ}の長谷川平蔵^{はせがわへいざう}であり、彼が悪人を成敗^{せいばい}する姿は勧善懲悪の世界を体現している。しかし、長谷川平蔵が「犯科帳」という書物を作成した事実はない。それでは、「犯科帳」とは何か。新村出編『広辞苑（第六版）」をみると「江戸時代、長崎奉行所の判決記録。一六六六―一八六七年（寛文六―慶応三）の記録」とある。

私も各地で史料調査をしているが、「犯科帳」という文書は長崎奉行所が作成し、現在長崎歴史文化博物館が収蔵している国指定重要文化財の全一四五冊しか確認していない。つまり「鬼平犯科帳」とは、池波正太郎氏の造語ということになる。しかし、マスメディアによる影響もあり、「鬼平犯科帳」が「元祖」「犯科帳」より有名なのは皮肉なところである。

私は「犯科帳」をもとに、江戸時代の司法制度について研究している。「犯科帳」を分析していくと、江戸時代の縮図を見出すことができる。江戸時代は男性社会であったが、それ故に犯罪に

関与するのも男性が非常に多かった。こうした男性社会の弊害に相反して、「犯科帳」に収められる女性による犯罪数が極めて少ないのは当時の特徴といえよう。

また、日常生活の隣り合わせで起こる犯罪は今日でも共通しており、事件に関与した人の心的状況は、昨今とさほど変わらない。具体的に挙げれば、離婚を望む夫に恨みを持ち、就寝中の夫を妻が刺し殺すという事件。酒癖の悪い息子を注意した父親に対して息子が殴りかかる事件。抜荷^{ぬけに}（密貿易）で一攫千金^{いつさくせんきん}を企てる事件。油の産地を偽装した事件、生活苦から盗みを重ねる事件など、今日でも報道で見聞きする事件が多数収められている。つまり、「犯科帳」を読み解くことで、現在の人間社会との継続性もみられ、勧善懲悪の世界にはないリアルな人間模様がここにある。

「犯科帳」をみると時代劇で見聞きする刑罰が記されている。江戸時代の刑罰は、今日と比べると種類が多いのが特徴のひとつであり、生命刑^{せいめいけい}（死刑^{しつげい}）にしても磔^{はりつけ}・獄門^{ごくもん}・火罪^{かざい}・斬首^{ざんしゅ}・死罪^{しざい}・切腹^{せつぷく}などがある。これ以外に流罪^{りゅうざい}や追放^{ついほう}、罰金刑^{ばつぎんけい}にあたる過料^{かろう}、肉刑^{にくけい}にあたる入墨^{いれすみ}や敲^{たたき}、厳重注意にあたる急度叱^{きつどしか}、注意に

あたる叱しかりなどと様々である。死刑に色々と種類があるのも、犯罪の種類によって科刑を選別したためで、即死か否かを含めて罪人の処刑過程における苦しさ、惨めさが刑の重軽に反映されている。同じ犯罪に関わっても、その役割の高さなどを考えて刑罰が決定されるなど、厳密な取り調べと法の選定が行なわれていたのである。こうした刑罰を申し渡す根拠となる法律を役人が精査する姿は、今日の法治国家を彷彿ふたふたとさせる。

この一方で、江戸時代らしい裁判の特徴に、被害者の身分（立場）によって量刑りやうけいが大きく異なることがある。先に挙げた妻が夫を殺害した場合は生命刑で一番重い「磔」が申し渡されている。これに対して夫が妻を殺害した事件もあり、その時は生命刑で一番軽い「死罪」の判決となるが多かった。また、親を負傷させた息子には「獄門」が申し渡されたことに對し、息子に暴力を加えた親には「叱」の判決が出るなど、被害者・加害者の関係性によって量刑格差が甚だしかった。ここには当時の儒教思想があったためで、今日の「法の下の平等」からすれば、違和感のある裁判が行なわれていたのである。

今年、日本の司法制度に「裁判員裁判」が導入された。制度導入にあたり、多くの報道番組で取り上げられているが、私もテレビ局からドキュメンタリーの取材を受けた。この内容は江戸時代の司法制度から今日の裁判員制度の問題点を、「犯科帳」を用いながら紹介するものである。番組のなかで弁護士の方と意見交換したが、ここで裁判員には法解釈を求めているのではなく一般常

識を法廷に反映させることを目的としているという話があった。これを聞いたとき、裁判官に一般常識はないのかと不安に思ったが、よく考えると私自身、学生や講座の受講者から時折発せられる質問にハッとさせられることがある。我々は専門性を追求するあまり、意外なところを見落としていることがある。こうした感覚を裁判員裁判では求めているのではないかと感じた。しかし、法治国家の現在、裁判員制度により地域的な量刑格差は生じないのかなどと素人ながらに疑問に思うことがある。

また、日本人気質きしつにも対極的なところがある。被害者のなかには公に裁きを任せることによって精神安定を求める一方で、殺人犯には極刑きょくけいをとという武士道の「敵討かたうち」の精神構造も今なお受け継がれている。手法は変われど、公衆が武士道の世界に巻き込まれることも想定される。これを望むもの、望まないものがあるなかで、その舵取りをする裁判官は重責を負っている。

この度、思文閣出版から『近世長崎司法制度の研究』を上梓じょうしすることになった。「犯科帳」を主な素材として、長崎奉行所を中心に江戸幕府の司法制度を明らかにした。本書を通じて、今日と変らない人間模様と、これに相反して成長した日本の司法の姿を再認識していただければ幸いである。

「犯科帳」は約八四〇〇件の判例はんれいを採録しており、現在二五〇〇件程を分析してきた。残り約六〇〇〇件を抱えて「二件落着いっぴんらくちやく」には程遠い。私の「犯科帳」との闘いはまだまだこれからである。

書けること、書けないこと、書ききれないこと

富永望

この度初めて著書『象徴天皇制の形成と定着』を刊行するにあたり、原稿とは別にあとがきを執筆することになった。以前に発表した論文を編集しなおした本文とは異なり、こちらは短期間で用意しなければならぬが、研究書のあとがきというものはたいして書式が決まっている。

まず研究を始めた動機や苦労話から入り、収録論文について説明する。これは順序が逆の場合もある。そしてお世話になった人への謝辞が延々と続く。指導教官に始まり、研究室の先生方ならびに研究者仲間、個人的な付き合いのある友人ときて、最後を家族で締めくくることが一般的である。近年ではそれに加えて、人文科学研究の環境の悪化や大学行政の迷走について歎くものも多い。今回私はこの定型を崩してみようかと思ったが、いざ執筆の段になると、やはり慣行に従うことになった。理由はいくつかある。第一に、これが最初の著作だということである。大学院進学以来一〇年かかって一冊の本を出すことができたのだが、この調子だと二冊目はいつになるかわからないし、そもそも出せるという保証もない。最初で最後の著作になるかもしれないと思うと、今

のうちにお世話になった方々への挨拶を済ませておくのが無難だろうと考えてしまうのである。

第二に、初校で見つかった誤記ならびに修正を必要とする文章のあまりの多さに、氣力を削られてしまった。今更何か氣の利いたことを書いてやろうと思っても、時間がない上に発想も湧いてこない。

第三に、受けを狙って外した場合のリアクションが怖い。実は私はわりと人を笑わせたがる性分なのだが、残念ながらユーモアのセンスを持ち合わせていない。非常勤講師として教壇に立つ際も、できることなら毎回学生を笑わせたいと思うのだが、出講一年目に無残な失敗を繰り返したのがトラウマとなり、九〇分間きまじめな顔を崩さない授業をするようになってしまった。世間にはあとがきだけ先に読んでから買うかどうかを決めるという人が多いので、拙著についてもあとがきだけ読んで放擲するというのが続出するような事態は避けたいと思い、あえて笑えるあとがきに挑戦しなかった次第である。

その一方で、書きたいけれども書けなかったこともあった。前

述の人文科学をめぐる昨今の環境についてである。およそ人文科学の研究者で、文部科学省に不平不満を持たない者はいないだろう。私も文部科学省を調伏する呪詛の札を拙著の付録として同梱したかつたくらいである。とはいえ、拙著の刊行にあたっては文部科学省から科学研究費補助金研究成果公開促進費が拠出されている。この先またお世話になるかもしれない以上、減多なことはいえない。官僚諸氏が定年までに拙著を手にとることなどまずあるまいが、ご機嫌を損ねない方がよい。げに恐ろしきはスポンサーである。

そして実際に拙著のあとがきにも書いたが、天皇制をテーマとすることもあって、研究者以外の知己については名前をあげて謝意を表することができなかった。私には小学校の入学式以来四半世紀以上のつきあいになる友人が二人いて、彼らは今でも時々出不精の私を遊びに連れ出してくれる。記念すべき最初の（そして最後になるかもしれない）著書のあとがきに彼らの名前を載せたかったのだが、断念せざるをえなかった。特に彼らは二人とも珍しい苗字の持ち主であり、簡単に特定できてしまうのである。私の「富永」も異体字なので、ありふれた苗字ではないのだが、友人二人の苗字の珍しさは際立っており、私はいまだかつて一度も彼らと同姓の人を見たことがない。社会人としては道を踏み外した日々を過ごしている研究者と異なり、市井で堅気として生活している彼らにとっては、天皇制を論じた本で名前をあげられることで迷惑を蒙ることはあっても、利益を得ることはまずないと思

われる。これが外国の君主制を扱っていたら気兼ねすることもないのだろうが、このあたりが日本における思想言論の自由にはめられた最後の枷に他なるまい。

逆に、名前を載せても支障はないが、多すぎてきりがないのが親戚一同である。私は幼少の頃から親戚のおじさんおばさんに会う度に、「将来の学費にしてね」と小遣いを貰い続けてきた。世間では「お母さん銀行」なる小型金融機関がそのようなお金を回収して、いつの間にか不払い状態に陥る現象が頻繁に発生しているらしいが、私の母はそのような不正流用に手を染めなかったし、私も親戚の言いつけを守って一銭たりとも手をつけなかった。それらのお金はひたすら銀行に貯まり続け、大学進学以降の学資になった。この機会に拙著のあとがきでお礼を述べたいと思ったのだが、なにせ人数が多い。全員は書ききれないし、書き漏らしてしまう名前が出るのも避けられない。そのような理由で「親戚一同」という表現でまとめたが、言ってみれば読者が知ることのない無名の人々が拙著の刊行を支えてくれたのである。それは歴史全般にも通じることであろう。英雄でも賢者でもない、平凡な人間一人一人の日々の営みが歴史を作っているのだということを肝に銘じて研究を続けていきたい。

（大阪産業大学非常勤講師）

スイスで見たこと・考えたこと

久留島 浩

二〇〇九年六月末から四か月間、スイスのチューリッヒ大学で在外研修をする機会を得た。当初、設定した研修目的は三つだった。一つは、近代国民国家形成期におけるスイスと日本の比較研究。二つめは、当地における博物館の日本展示についての調査・研究および収蔵している日本関係コレクションの概要調査。三つめは、外国における日本近世史料解説教授法についての実践的な研究である。このうち、一つめについては、語学の壁がヴァリス・アルプス以上に険しく、課題をそのままフリーズして持ち帰るはめになったが、残りの二つについては得るものがあつた。

まず、三つめの課題については、チューリッヒ大学がジャバンファンデーションから得た資金で、近世古文書を解説するワークショップ（連続五日間）と、画像史料から国際関係を中心とする近世社会像を読み解くというセミナー（一回）を開くことができた。専門的な用語についての共通理解が十分ではない日本近世の文献や画像資料をどのようにテキストにするかについて、スタッフと議論しながら準備し、院生の助力もあって毎回少しずつではあるがドイツ語の対照表をつくることができた。

ワークショップは、東洋美術学科教授で日本近世美術史を専門とするハンス・トムセン教授と相談し、近世美術に関わるテキストにしたので、スイス以外にも多数の美術史研究者が参加した。期間がきわめて短いといううらみはあつたが、それこそ多くの研究者が参加し、きわめて熱心に解説に取り組むのを見て、日本語を母語としない研究者や日本語を母語とするが永年海外に居住したうえで日本文化について自ら学ぼうとしている人たちにとって、このような近世の古文書を解説する機会がいかに重要で、かつ必要とされているかを痛感した。また、このような前近代の基本的な史料解説のワークショップの「出前」を積み重ねないと、日本前近代を専門とする若手の研究者は育たないとも感じた。

後者のセミナーの参加者は、チューリッヒ大学の院生・学生・聴講生たちにとどまったが、若手研究者の日本文化理解を深める一助になったのではないか。

しかし、何よりも大きな収穫は、スイスにおける博物館の日本展示についての調査・研究、日本コレクションについての概要調査を何か所かで行うことができたことである。研究スペースが

リートベルグ美術館内にあったので、展示品についてじっくり見学できたほか、収藏品についても、副館長カテリーナ・エブレヒト氏およびハンス・トムセン氏とともに数点の俳画（建部巢^{たけべそうしやう}兆作とされる）を熟覧できた。文人社会の間では人気があったので、すでに近世に模倣されたり、偽作されたりしたようで、「真偽」だけで言うと言を傾げざるをえないものがあつた。しかし、重要なのは、そうしたなかにも、レベルの高い俳画が散見されたことである。むしろ、「真偽」を確定できない作品から逆に、一九世紀の文人社会の広がりや質の高さを実感したと言つてもよい。

また、谷文晁の手になる「大和図絵巻」に遭遇することもできた。文晁が、寛政四年、松平定信の命で実施された畿内の寺社宝物調査に同行して、絵画による記録にあたつたことはよく知られているが、この絵巻はこれと関わるものではなからうか。実は、在外研修中、この一〇年間取り組んできた明治期の奈良のコレクター水木要太郎に関わる研究論文集を思文閣出版から刊行したので（『文人世界の光芒と古都奈良』）、この論集の基調と通底するような資料にスイスで偶然出会うことができたのである。熟覧の機会は多くはなかったが、同美術館がスイスのなかでもっとも質の高い日本コレクションを持っていることがよくわかつた。

この他には、バーゼル美術館、ベルン歴史博物館、サンクトガレン歴史博物館の収蔵庫で日本コレクションの調査を行い、さらにこれ以外の都市にあるいくつかの博物館で日本展示を見ることができた。バックヤードに収蔵されている日本コレクションはか

なりの量にのぼるものと思われる。ヨーロッパ内の博物館などに収蔵されている日本関係コレクションについては、すでにヨーゼフ・クライナー教授（ボン大学、現法政大学）が中心となつて調査が実施され、その成果は Josef Kreiner: *Japanese Collections in European Museums Volume 1, 2* として刊行されている。これ自体はきわめて先駆的な仕事だが、スイス国内ではほんの少しバックヤードを覗いただけでも、調査から漏れているものがきわめて多いことがわかつた。興味深い生き人形も埋もれていた。

同時に、必ずしもその保存環境は良いとは言えず、資料の状態もよくないものが散見された。そのうえ、日本美術や歴史を専門にしている学芸員がきわめて少ないという状態のなかでわたしたちに求められているのは、このような海外における日本コレクションの所在調査を計画的に実施し、その情報の公開・利用の促進、修復・保存方法を一緒に考えることだと思つた。また、ごく一部の仏像・漆器・刀やつば・甲冑・浮世絵などが、どこでも「日本文化」の代表として展示されており、全体としてきわめて似通つた展示構成になっているという印象を持つた。実際には、コレクターの個性に応じてある程度特徴があるはずなのだが、それが展示に反映されず、画一された「日本展示」になつてしまつているのである。海外における「日本文化」イメージをもう少し豊かなものにするためにも、まずこうした日本コレクションの実態を把握し、展示にまで眼を配る必要があるのではないか。

（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授）

書評・紹介一覧 8～10月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]
富士川游著作集 (記)毎日新聞 9/27	茶の医薬史 (紹)『なごみ』8月号	
慚愧の精神史 (書)『仏教史学研究』第52巻第1号(江上琢成)	(紹)茶の湯文化会・東京例会々報 第38号(楽隠)	
逆欠如の日本生活文化 (記)産経新聞 8/21	(記)日本経済新聞 9/28	
日中戦争についての歴史的考察 (書)『史学雑誌』第118編第7号(永井和)	神社継承の制度史 (紹)神道フォーラム 第29号	
室町・戦国期研究を読みなおす (書)『史林』477号(川岡勉)	祈りの文化 (紹)『日本歴史』第737号	
明治前期の教育・教化・仏教 (書)『日本の教育史学』第52集(梶井一暁)	(紹)京都新聞 9/27	
日本古代の伝承と歴史 (紹)『日本歴史』第735号(鈴木正信)	(紹)『小さな蕾』第495号	
経筒が語る中世の世界 (紹)『史学雑誌』第118編第7号(湯川紅美)	九州の蘭学 (記)大分合同新聞 8/14	
室町期東国社会と寺社造営 (書)『日本歴史』第737号(横田光雄)	(書)日医ニュース 10/5	
鎌倉時代の権力と制度 (紹)『史学雑誌』第118編第7号(西田友広)	(紹)京都新聞 10/11	
(書)『日本歴史』第737号(下村周太郎)	松前景広『新羅之記録』の史料的研究 (紹)北海道新聞 9/6	
埴仏の来た道 (書)『日本考古学』第28号(時枝務)	武野紹鷗 わびの創造 (紹)『淡交』第780号	
口頭伝承と文字文化 (紹)『地方史研究』第341号(西村敏也)	(紹)『茶華道ニュース』第630号	
	(書)『茶道文化』第728号(谷見)	
	風俗絵画の文化学 (紹)中外日報 10/24	
	キリシタン大名の考古学 (紹)読売新聞 9/20	
	緒方洪庵 (紹)産経新聞 10/15	

8月から10月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
実国・師光全歌注釈	小田剛著	1478-5 C3091	18,900	8
緒方洪庵	中田雅博著	1482-2 C1021	2,625	9
茶の湯文化と小林一三	逸翁美術館編	1485-3 C1076	2,000	10
春秋 京大和翠紅館	木村幸比古ほか著	1417-4 C1052	2,940	10
文人世界の光芒と古都奈良	久留島浩・高木博志・高橋一樹編	1481-5 C3021	8,190	10
東アジアのなかの日本	上田正昭著	1479-2 C1021	2,520	10

8月から10月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
東寺百合文書	7	7	二函二	1480-8 C3321	9,975	10

(表示価格は税5%込)

営業部より

▼「事業仕分け」の最後に書いております。「聖域」にメスが入るのを痛快(?)と一方面的な思いで様子を見ておりましたら、科研費にまでメスが入ってしまった。将来、子供が研究者になると言い出したらどうしようかとあらぬ心配をしておりますが、せめて理系にしてねと言おうと思っております。(江)

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店(東京都新宿区)

歴史書懇話会フェア

「日本の国家形成―飛鳥文化の時代」

二〇一〇年一月三十一日まで

早稲田大学生協コーププラザ店(新宿区)

「歴史書懇話会フェア」

二〇一〇年一月三十日まで

啓林堂書店奈良ビブレ店(奈良県奈良市)

「平城京遷都千三百年記念フェア」

☆学会出版情報

小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

日本仏教総合研究学会(京都府立大学)

十二月十三日(日)

人文科学とコンピュータ研究会

(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

十二月十八日(金)・十九日(土)

編集後記

▼わたくしは自己紹介のたびに「けったいな名字やなあ」と笑われます。このたび山路先生から、時代祭行列に登場する同姓の人物についてご教示をうけました(もちろん子孫ではありません)。来年はぜひとも平安神宮前で、華やかな行列を見物したいものです。(R)

▼W杯の出場国が決まりました。応援するポルトガルも出場枠に滑り込み一安心。私はテレビ観戦に備え地デジの導入を決意しました。しかし仕事とW杯の両立は出来るのか? 来年の大きな課題になりそうです。(M)

▼ある時、時間と生活空間との関連を聞きました。狭い所では時間が速くすぎると感じられ、広い所ではゆったりと感じられるとか。気が付けば、今年も残り僅か。来年はゆったりと時間を感じられるように。(I)

▼誘惑に負けてこの冬も炬燵を出してしまいました。あまりの心地よさに少々後悔はしていますが、強い意志で、居眠り↓そのまま熟睡しないようにしたいと思います。(N)

▼規模は違えど、小社でも現在、予算の「仕分け」作業真っ最中です。限りある広告宣伝予算を年度内にどう使うのか、新刊の刊行予定をにらみながら、悩みに悩んでいます。(h)

▼表紙図版…六斎念仏の図(『拾遺都名所図会』)／「京都 芸能と民俗の文化史」より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.76

2009(平成21)年12月10日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

京都

芸能と民俗の

文化史

山路興造著



祇園御霊会や大念仏狂言、やすらい花、六斎念仏、賀茂社の御戸代神事など、芸能史研究の第一人者による、京都の芸能民俗史

【内容】

序にかえて―月なみの京都―

祇園御霊会と祇園祭り

二つの祇園祭り

祇園御霊会と祇園祭り―

馬長童・久世舞車・羯鼓稚児―

祇園祭りの芸能と囃子

祇園祭りの稚児舞・再考

室町幕府と祇園祭り

祇園祭りの鉦と女性

もう一つの鉦祭り

京都の民俗芸能

―その歴史―

大念仏狂言考

六斎念仏考

―京都の六斎念仏を中心に―

やすらい花考

松尾大社の御田植祭り

京都芸能史考

山城国一宮賀茂社の

御戸代神事

貴船のささ神輿考

京都の民俗行事

京都の盆行事

―その歴史的考察―

京都の盆踊りと民俗行事

▼A5判・三六八頁／定価七、八七五円

やまじ こうぞう…一九三九年東京都生まれ。京都市歴史資料館館長などを経て現在、同志社女子大学・京都女子大学などの講師、京都嵯峨芸術大学客員教授、藝能史研究会代表委員・民俗芸能学会代表理事。

風俗絵画の文化学

都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

中世から近世における風俗絵画のメディア性に着目し、歴史学・美術史学・文学・宗教史学などの多岐にわたる分野の専攻者が、様々な視点からアプローチし、その分析に挑む十三篇。カラー口絵四ページ。

▼A5判・三七〇頁／定価六、八二五円

祈りの文化

大津絵模様・絵馬模様

信多純一著

江戸時代から手軽な土産として全国津々浦々の人々に愛された民画・大津絵。その起源・絵馬との共通点・画題の意味など新考察を加え、多くの図版をあげて解説した全大津絵の事典。

▼B5判・一七八頁／定価三、六七五円

東アジアのなかの日本

上田正昭著

日本列島の歴史や文化の実像をよりあざやかにするために、海を媒介とするアジアとのかわり、とりわけ東アジアとの関係を重要なテーマとしてきた著者がまとめた最新の一書。

▼四六判・三七〇頁／定価二、五二〇円

翁の生成

渡来文化と中世の神々

金賢旭著

中世の翁信仰の生成過程を諸縁起や史料から読みとること、そこに色濃く反映された韓半島からの渡来文化の姿を見だし、さらに日本芸能のルーツである翁猿楽の成立について、韓半島のシャーマニズム文化の影響を指摘する。

▼A5判・二五〇頁／定価五、二五〇円

茶の湯文化と小林一三

いちぞう

逸翁美術館編

【最新刊】



阪急東宝グループを起し、明治・大正・昭和の実業界で活躍した小林一三（逸翁）。またその一方「近代数寄者」として確かな審美眼で収集された膨大なコレクションは、その遺志で逸翁美術館として受け継がれた。本書では、5つのテーマ「茶道との出会い」「逸翁の茶懐石」「逸翁と茶友」「逸翁の茶道観」「逸翁の愛した茶道具」にそって、館所蔵の小林一三コレクションをオールカラーで紹介。小林一三を敬愛する文化人・研究者が各テーマに沿った文章を寄稿。

▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円

原三溪翁伝

さんけい

藤本實也著

三溪没後七〇年・横浜開港一五〇周年記念出版



原三溪（さんけい）は、生糸貿易や製糸業で活躍した横浜の事業家。美術・茶道に造詣が深い文化人・パトロンであり、広大な私邸を三溪園として一般公開し、関東大震災後の横浜の復興に尽くすなど、社会事業家としても活動した。藤本實也が戦時中にもまとめ、稿本のままで活字化されなかった幻の原稿『原三溪翁伝』を、横浜開港一五〇周年を記念して、校訂を加えて刊行。

▼A5判・九三六頁／定価一六、八〇〇円

革新の書人 河東碧梧桐

かわ ひがしへきごとう

島田三光著

【最新刊】

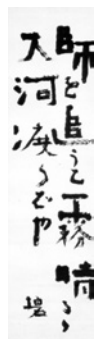
河東碧梧桐の書に魅せられ、その書作品・石文・看板等を求めて全国を廻り続けて三十五年、碧梧桐に関するコレクションでは第一人者であり、書家としても活躍中である著者所蔵の豊富な作品群を通して碧梧桐の書の世界を紹介。正岡子規の高弟であり虚子と並んで双璧と謳われる碧梧桐の書を見直すとともにその業績を後世に伝える一書。

【内容】

碧梧桐作品集

カラー24頁・モノクロ58頁

碧梧桐の書



書風の変遷（落款を中心として）／龍眠会／書簡／碧梧桐百句選／文房具・自用印／自著自題／俳誌「碧梧桐追悼号」に見る書道観
石文・商業文字探訪

石文（カラー）／商業文字（カラー）

▼A4判・二一〇頁／定価五、二五〇円

しまださんこう……一九五〇年生。書家。日展会友。読売書法会理事。日本書芸院評議員。書道研究天真会副会長。讀友書道会主宰。

くずし字辞典

波多野幸彦監修・東京手紙の会編集

天皇・公家・武将・僧侶・茶人・文人・商人などの実用の書である自筆消息（書状）からの筆跡（くずし字）を、また必要に応じて中国の代表的書家・文人からも拾集した画期的な辞典。著者総数四〇〇人を与える筆跡を採集。各文字に筆者名を付す。

▼A5判・一四〇〇頁／定価六、三〇〇円

春秋 京大和翠紅館

【最新刊】

「私は、京都市街がもつとも美しく見られる料亭はどこかと問われれば、躊躇なくそれは京大和であると答える。」

(梅原猛・序より)

京都の老舗料亭京大和がある東山霊山のふもととは、古くからの聖地であり、風光明媚な仙郷であった。江戸時代には西本願寺の別業であり、翠紅館と称された。また、幕末には尊皇の志士が結集した「翠紅館会議」で知られる。その歴史、庭、建物、カラー口絵と解説で紹介。特に、江戸時代の翠紅館の姿そのままに大正時代に建てられた建物や武者小路流の茶室について、和建築の第一人者である中村昌生氏が、多数の図面とともに詳述する。



【内容】

序 (梅原猛)

カラー口絵24頁

翠紅館の歴史 (木村幸比古)

翠紅館の庭 (中根史郎)

翠紅館の建物 (中村昌生)

▼B5判・八〇頁／定価二、九四〇円

大工頭中井家建築指図集

谷直樹編著

中井家所蔵本

江戸幕府の京都大工頭を代々勤めてきた中井家に伝わる建築指図を集成。中井家の職務に対応した、城郭、武家屋敷、内裏、公家屋敷、寺院、神社、数寄屋、書院の指図や、さらに、洛中図・町絵図・橋図など、土木関係の絵図も豊富にそろっている。図版五一七点を大判で収録し、解説を付す。

▼B4判・三八六頁／定価一八、九〇〇円

祭りのしつらい 町家とまち並み

岩間香・西岡陽子編／京極寛写真

祇園祭・天神祭をはじめ、城端(富山県)や倉敷(岡山県)・村上(新潟県)・大津・日野(滋賀県)など各地の祭り飾りや造り物などをとりあげ、町家とまち並みを飾る祭りの文化を紹介。カラー60頁。

▼B5判・二二四頁／定価二、三一〇円

八瀬童子 歴史と文化

宇野日出生著

今まで非公開であった八瀬童子の関係文書を調査し、民俗調査を行った著者が、彼らの苦難にみちた激動の歩み、そして今に伝わる思想・行動を歴史に裏付けられた「文化」としてとらえた一書。掲載図版87点。

▼四六判・二一〇頁／定価一、八九〇円

京の鴨川と橋 その歴史と生活

門脇禎二・朝尾直弘編

歴史都市京都のシンボルの存在である鴨川とそこに架かる橋について、平安京以前から昭和まで、各時代の様子を具体的に明らかにし、人々の暮らしの中でどのような意味を持っていたかを探る

▼四六判・二五〇頁／定価二、三二〇円

京都 高瀬川 角倉了以・素庵の遺産

石田孝喜著

近世から昭和まで、京都と各地を結ぶ大運河であった高瀬川。歴史に埋もれた史料をねばり強く探索してきた著者が、運河開削の歴史をたどり、舟入や橋の変遷など、多方面から歴史と文化のすがたを描く。図版多数。

▼A5判・二五〇頁／定価二、三一〇円

中世前期女性院宮の研究

山田彩起子著

【1月刊行予定】

院政・鎌倉期における女性院宮（女院・后）の多様な存在形態を様々な視点から分析。第一部では、国母の存在形態の多様性と王家における役割・位置付けを論証し、第二部では、摂関家出身の女性院宮の摂関家における独自の役割の大きさを検証する。中世前期の女性院宮研究のみならず、中世の公家社会研究に寄与する一書。

やまだ あきこ

明治大学文学研究科博士後期課程修了。明治大学兼任講師。

▼A5判・三二〇頁／定価五、八八〇円

第一部 国母としての女性院宮

第一章

平安後期から鎌倉初期における国母と妻后の内裏居所について

第二章 平安中・後期における院宮年始賀礼の変遷

第三章 天皇准母内親王に関する一考察

第四章 天皇との猶子関係にみる女性院宮の特質

第五章 鎌倉期における後宮の変容とその背景

第二部 摂関家と女性院宮

第一章 四条宮藤原寛子の摂関家における位置

第二章 高陽院藤原泰子の摂関家における位置

第三章 皇嘉門院藤原聖子の摂関家における位置

東寺百合文書

既刊7冊

京都府立総合資料館編

【年一回刊行】

本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

【既刊構成】

- 第一巻 イ函・ロ函一 第二巻 ロ函二
- 第三巻 ロ函三 第四巻 ロ函四・ハ函一
- 第五巻 ハ函二 第六巻 ハ函三・ニ函一
- 第七巻 ニ函二

▼A5判・平均四五〇頁／各定価九、九七五円



禁裏本歌書の蔵書史的研究

【最新刊】

酒井茂幸著

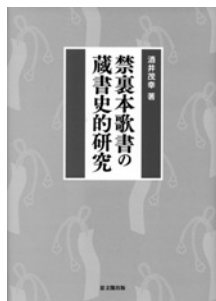
従来の和歌文学の書誌学的研究が、個別の資料に基づき行われてきたのに対し、本書では禁裏本の総体を蔵書群として捉え、同時代の公家日記や古歌書目録類を援用しつつその伝来の歴史を跡付ける。

また、禁裏における歌学や古典文学の注釈・講釈に注目し、中世後期以降、歴代天皇がどのような歌書を求め、書写し、収蔵していったかを明らかにするのが本書の目的である。

▼A5判・三三六頁／定価五、八八〇円

さかい しげゆき

早稲田大学大学院博士課程修了。埼玉大学非常勤講師。

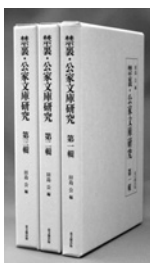


禁裏・公家文庫研究

既刊3冊

田島公編

勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介、データベースを収載するシリーズ。



- ▼第一輯 B5判・三九〇頁／定価一〇、二九〇円
- 第二輯 B5判・四〇六頁／定価一〇、二九〇円
- 第三輯 B5判・四九六頁／定価一二、三九〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

【1月刊行予定】

長崎奉行の司法的権限を明らかにするとともに、近世都市長崎の司法体制を説明。また、奉行所の司法機関としての機能を明かし、幕藩体制国家における遠国支配と江戸幕府機構における司法体制の一端を考究する。

やすたかひろあき…中央大学文学研究科博士後期課程修了。西南学院大学博物館学芸員。

▼A5判・五一二頁／定価五、九八五円

第一部 江戸幕府法の受容と

第一章 長崎の法体系

第二章 対外的法規の確立

第三章 犯科帳と公事方御定書

第二部 長崎奉行と司法機関

第四章 幕府評定所と長崎奉行の司法的概念

第五章 長崎奉行所関連機関と司法制度

第六章 長崎奉行の司法権

長崎奉行の研究

鈴木康子著

17世紀後期から約一〇〇年間の、長崎奉行の職掌や幕府内における位置づけの変化、長崎奉行自体の特質が変質してゆく状況を説明し、その背景となる幕府の経済政策の推移や、日本側の外国人に対する意識の変化についても考察を加える。

▼A5判・四二〇頁／定価六、五一〇円



熊本藩の地域社会と行政

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

近代社会形成の起点

永青文庫細川家文書に残された地方行政記録「覚帳」、住民の評価・褒賞記録綴「町在」の系統的分析を行い、19世紀段階の近世行政システムの全容を解明。

▼A5判・四二〇頁／定価九、四五〇円

広瀬旭莊全集 詩文篇 (全1冊)

きよくそう

岡村繁・井上敏幸編

江戸末期折衷派の儒者・広瀬旭莊の顔でもある詩文を収める。広瀬先賢文庫所蔵の著書・文書・書簡の類を全て網羅する全集の待望の最新刊。



【12月刊行予定】

▼B5判・八六二頁／定価三一、五〇〇円

既刊 日記篇(全9冊)・随筆篇(全1冊)

揃定価一四九、一〇〇円

松前景広『新羅之記録』の

新藤透著

史料的研究

中世から近世初期の北方史研究における最重要史料『新羅之記録』についてはじめて本格的に書誌学的に考察を試み、その史料的价值を明らかにする。

▼A5判・五一八頁／定価二二、六〇〇円

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

近世幕藩制社会における全国的官位官職制度の中に「御用絵師」はいかに組み込まれ、時の為政者は職能集団たる絵師の組織をいかに編成・掌握し、絵師たちはどのような身処し方をしていたのかを考察。

近世御用絵師の史的研究

▼A5判・四五八頁／定価七、八七五円

瑞泉寺史

横山住雄（濃尾歴史文化研究所主宰） 著

【最新刊】

応永二十二年（1415）日峰宗舜の開創にかかる臨濟宗妙心寺派の重要寺院・青龍山瑞泉寺（大山市）の歴史を、通史編 伽藍・塔頭編、史料編の三部構成で伝える。

内容

通史編

瑞泉寺の概要／中世の瑞泉寺／永祿の災禍と復興期／近世の瑞泉寺／独住時代の瑞泉寺

伽藍・塔頭編

伽藍／塔頭／旧末寺・末庵史料編 中世史料／近世史料／史料等写真

史料編

中世史料／近世史料／史料等写真 瑞泉寺開堂法語／龍濟寺蔵本／『青龍史考』（抄）（可山禪悦・謙宗正道）／『青龍山瑞泉寺記』／『大山祝聞図会』（瑞泉寺の条）



▼A5判・五七〇頁／定価二一、〇〇〇円

悟溪宗頓

芳澤勝弘編著

虎穴録訳注

【最新刊】

妙心寺派四派の一つ東海派の祖であり、瑞龍寺開山である、悟溪宗頓（一四一六～一五〇〇）の語録『虎穴録』を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施した。

▼A5判・八四四頁／定価一〇、五〇〇円

江月宗玩

芳澤勝弘編著

欠伸稿訳注 乾

江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵目筆本を翻刻。詳細な註釈と現代語訳を施す。分量的には、写本『孤蓬庵本』のほぼ半分だが、『孤蓬庵本』にはない偈頌等を収録。江月の人柄を示すとともに、多くの文化人との交流を記録している。文化人の消息を窺う貴重資料ともなっている。

▼A5判・六四四頁／定価九、九七五円

禅語辞典〔7刷出来〕

入矢義高監修／古賀英彦編

禅語録中の難解な語句すべて（約五、五〇〇）について、平易なことばで解釈を施した画期的な辞典。いわゆる漢文の語法では読めない口語の解説が備わり、禅宗寺院・茶道家・宗教史研究者は勿論、漢文を読むすべての人に必携の書。

▼A5判・六〇〇頁／定価九、九七五円

博仏の来た道

白鳳期仏教受容の様相

後藤宗俊著

「博仏の来た道」を丹念にたどり、あわせてその途上に浮かび上がる玄奘・道昭・法蓮などの偉大な僧の信仰と人間像に迫る。虚空蔵寺跡の調査に携わった著者が考古学・美術史・文献史学などの領域にわたって学際的に探った一書。

▼A5判・三二二頁／定価五、九八五円

キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所企画シリーズ②「ヒトとモノと環境が語る」別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編 文献学や分析科学などの他領域の成果を融合し、戦国城下論・キリシタン考古学論・流通論など、新たな研究方法を提示する一書。

▼B5判・一七八頁／定価三、九九〇円

経筒が語る中世の世界

別府大学文化財研究所企画シリーズ①「ヒトとモノと環境が語る」小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司編 主に九州出土の経筒をとりあげ、考古学・歴史学・美術史学に加え、先端機器を駆使した先駆的研究も収録。さまざまな切り口から「経筒が語る中世の世界」を描く。

▼B5判・二三六頁／定価五、〇四〇円

西村茂樹研究

明治啓蒙思想と国民道德論

真辺将之著

【最新刊】



西村茂樹

明治の啓蒙思想家・道德運動家である西村茂樹の思想について、従来の「保守」と「進歩」という二項対立的な枠組みから脱却し、時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を、史料に基づいて跡づける。

【内容】西村茂樹研究の視角／幕末・維新期における思想形成／啓蒙思想家としての言論活動／文部省時代の教育思想／『日本道德論』の形成過程／「聖学」構想とその変容／西村における道德と国家／日本弘道会とその支会／近代日本思想史における西村茂樹

▼A5判・五〇〇頁／定価八、一九〇円

まなべ まさゆき：一九七三年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。早稲田大学史資料センター助手。

増補西村茂樹全集

《全一二巻・既刊七巻》

古川哲史監修／(社)日本弘道会編

昭和五一年刊行の旧全集に収録されていた著作・論説の全てを解体し、分野別に組み込み内容を整理。旧版未収録の著作・訳述書・論説・その他も含めた全ての著作を全一二巻で刊行。【第一〇巻 論説Ⅰ 一二月刊行予定】

▼A5判・各巻平均七五〇頁／定価一七、八五〇〜一九、九五〇円

森有礼における国民的主体の創出

長谷川精一著

森有礼の言説や政策の目的が、日本国民の主体の創出にあったという視点から、外国語の史料や文献をも利用し、さまざまな角度から検討を加えた画期的な一書。

▼A5判・四六六頁／定価九、四五〇円

文人世界の

光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

水木要太郎（一八六五―一九三八）は、明治後半／昭和初期、奈良女子高等師範学校教授、奈良帝室博物館学芸委員などを歴任。一方で、大和地方の歴史・考古・地誌の研究活動を進め、大和古寺の瓦や経典、中世・近世文書、典籍や写本のほか、近世の刊本・刷り物や絵地図・暦本・著名文化人の書簡など、多様なコレクションを収集した。

本書は、この水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的な共同研究の成果。

【執筆】吉井敏幸／黒岩康博／岡島永昌／内田好昭／中井精一／高木博志

／久留島浩／岩淵令治／乾誠二／岩橋清美／丸山宏／高橋一樹／田中康二／鈴木健一／岡本彰夫（収録順）

▼A5判・五〇〇頁／定価八、一九〇円

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一編

幸田露伴は、明治・大正・昭和を通じて、すぐれた作品を発表し続けた。その膨大な作品群は、日本文学史はもとより、思想史・精神史などにおいても、非常に重要な存在である。本書は、さまざまな分野の研究者が集まり、小説や評論など文学面はもちろんのこと、都市・遊技・旅行・自然観察・人生論等々の著作を通じて多様な角度から露伴にアプローチする。

【執筆】井波律子／池内紀／白幡洋三郎／猪木武徳／細川周平／平松隆円／佐伯順子／井上章一／鈴木貞美／岩井茂樹／劉建輝（収録順）

▼A5判・三二八頁／定価五、二五〇円

象徴天皇制の形成と定着

富永望著

【最新刊】

これまで多くの人が論じながらも、明確な定義・起源をたどることをされてこなかった「象徴天皇（制）」という言葉に着目して、この用語の使用法を検証し、さらに吉田茂の憲法運用と、それに異を唱える政治勢力や憲法学者の天皇観を明らかにすることで、象徴天皇制は新憲法の運用の積み重ねによって形成されたことを実証する、気鋭の書。

【内容】

序章 問題の設定／「象徴天皇制」という言葉／日本側の大日本帝国憲法改正案再考

第一章 一九四八年における昭和天皇の退位問題 新憲法体制発足期の昭和天皇／退位問題の発生と展開／退位問題の帰結

第二章 吉田茂の新憲法運用 「象徴」の位置づけ／再軍備と統帥権問題／憲法学界の反応

第三章 一九五〇年代の改憲問題 保守勢力の改憲構想／社会主義勢力の天皇観／「象徴天皇」の普及

第四章 象徴天皇制の定着 吉田式憲法運用の継承と発展／改憲反対から護憲へ／憲法問題の沈静化

終章

補論 「日本憲法の再検討」問題

FECから見た憲法改正作業／日本憲法の評価／再検討の挫折

君主国憲法における君主規定「抜粹」



▼A5判・三一〇頁／定価五、〇四〇円

とみながのぞむ：一九七四年生まれ。京都大学博士（文学）。現在、大阪産業大学非常勤講師。

日本の朝鮮・台湾支配と

松田利彦・やまだあつし編

植民地官僚

国際日本文化研究センターでの共同研究の成果。

【内容】植民地官僚の出自／植民地官僚と政策形成／植民地官僚のメンタリティーと政策思想／「帝国」と植民地官僚

▼A5判・七五六頁／定価一三、六五〇円

立憲国家中国への始動

曾田三郎著

明治憲政と近代中国

従来の単線・単純な辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から叙述する中国近代史。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、四〇〇円

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その関係が築かれた歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。

▼A5判・三六四頁／定価七、一四〇円

条約改正交渉史

一八八七～一八九四

大石一男著

一八八七年～一八九四年にかけて、日本側の交渉戦略・交渉戦術、交渉相手の欧米列国の動向、日本国内における諸個人・諸集団の協力・対抗・競合の側面、の3つの視覚から分析する。

▼A5判・三五六頁／定価六、八二五円

谷澤忠彦（弁護士）著

情熱の移植医

【最新刊】

田中紘一の新たな挑戦

●若き日の「この子をなんとか助けたい」の一念から、生体肝移植術を開発し、確立した情熱の移植医・田中紘一。高校時代からの親友がその生き様を熱く綴る。



●シーボルト以来西洋諸国から学んだわが国で、今、田中を中心とする京大チームが、生体肝移植術を世界に発信する。さらにこの度、神戸の地で高度医療施設、並びに世界の医療人の教育・育成を目指す田中紘一の新たな挑戦が始まっている。

◆命と向き合う臓器移植医◆

【内容】

- 第一章 天才ではない、心優しい努力の人である
- 第二章 誠実なつき合い
- 第三章 京大教授に就任
- 第四章 臓器移植をとりまく諸問題
- 第五章 生体肝移植
- 第六章 なぜ、生体肝移植を
- 第七章 考え開発したのか
- 第八章 生体肝移植のめざすもの
- 第九章 臓器移植法案
- 新たな挑戦

▼四六判・二六〇頁／定価一、六八〇円



緒方洪庵 幕末の医と教え
中田雅博著



緒方洪庵

幕末の医と教え

産経新聞紙上に連載した「適塾再考」を、生誕二百年を迎えるにあたり、全面改訂・再構成。開国とグローバル化の激動の時代に「医は仁術」を実践し、適塾で弟子の教育に身を捧げた洪庵の軌跡を、平易な文章で詳細にたどる。

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円

九州の蘭学 越境と交流

ヴォルフガング・ミヒエル・鳥井裕美子・川島眞人編
長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異なる西洋近代科学にどう向き合い学び取ったのか、あるいは来日した西洋人が、知的交流や技術移転にどれほど貢献したのかを、最新の研究成果に基づき、彼らの業績と足跡を通して明らかにする。

▼四六判・三八〇頁／定価二、六二五円



茶の医薬史

岩間眞知子著

中国と日本

【増刷出来】



もともと茶は薬であり、日本や中国の歴代医薬書の中には茶の記事があった。そこには茶の効能や処方のはか異名・産地・製法も記されている。本書は、医薬書史料の影印を多数収録し、そこから日中の各時代の茶の様相とその歴史の変遷を明かす。

▼A5判・五二六頁／定価九、四五〇円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び よすが



八木一夫^{やぎかずお}は大正七年（一九一八）に陶芸家・八木一舂^{いっそう}の長男として京都に生まれました。昭和二年（一九四八）鈴木治・山田光らと共に、既存の伝統的な陶芸のあり方を打破し、実用性を離れたオブジェ的な焼物の創造をめざした「走泥社^{そうでいしゃ}」を旗挙げし、戦後の陶芸界に「前衛陶芸」という新しい造形分野を確立させました。

昭和四六年（一九七二）制作の本作品は、白化粧の茶

❖ 白い小壺 ❖

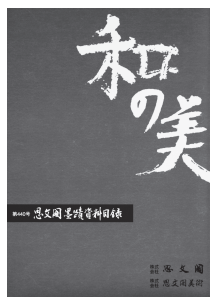
八木一夫

碗を二つ合わせたような姿をしています。この作品には前衛陶芸を制作しながらも、一方で作品としての器を制作しつつ、生涯「茶碗屋」を自称し、「私は茶碗に始まって、茶碗に終わる」とも語った、陶彫作家とは異なる、陶芸家としての八木芸術の本質があるのではないのでしょうか。

（ぎやらりい思文閣・大塚有為）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

TEL (075)531-0001 Fax (075)561-4386

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



百々世草

全三帖

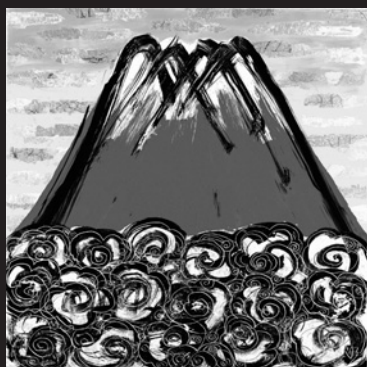
京都市東山区古門前通大和大路東入元町357

☎(075)752-0005 Fax.(075)525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣美術館 次回展のご案内



富士百観—雲海富士 2007年

開館三十五周年 記念特別展
京都が生んだ奇才
木田安彦「富士百観とふるさとの名山」

2010年4月24日(土)ー8月1日(日)

休館日 月曜日(但し、5/3・7/19は開館)・7月20日

京都市左京区田中関田町2-7

☎(075)751-1777 Fax.(075)762-6262

<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>

e-mail artm@shibunkaku.co.jp

思文閣会館ご使用の案内



2F フリースペース

展覧会や講演会など



3F 多目的ホール

会議や勉強会、趣味のお稽古場、ちょっとしたお集まりなど

B1F テナント募集中

飲食店や雑貨店、
倉庫などにご利用いただけます。

京都市左京区田中関田町2-7

お問い合わせは左記思文閣美術館まで